平成 22 年度　第２回運営会議　議事録

日時：2010 年 9 月 21 日（火）10:00～12:00
場所：大阪府庁新別館北館１階　さいかくホール

（出席委員）敬称略

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科　教授　増田　昇（委員長）
大阪大学大学院工学研究科　教授　　澤木　昌典
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科　准教授　　下村　泰彦
大阪市立大学大学院工学研究科　准教授　　嘉名　光市
大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）　特任研究員　　弘本　由香里
元読売新聞編集委員　　清野　博子
元大阪府立大学大学院　教授　前中　久行
泉佐野観光ボランティア協会　　吉野　勝
NPO 法人プラスアーツ　代表　永田宏和
うみべの森を育てる会　　西台　幸子
泉佐野丘陵緑地パーククラブ　会長　　殿元　日出夫
泉佐野丘陵緑地パーククラブ　副会長　　杉本　和彦

（オブザーバー）

大輪会　末澤事務局長

◆傍聴者

１名

◆進行

・資料の確認
・会議の公開について
・出席者紹介（前中委員・永田委員・殿元委員・杉本委員）

◆議事

〇報告案件について

事務局から「平成 22 年度　運営会議　開催計画・実績」、「泉佐野丘陵緑地パーククラブ設立式」、「パーククラブ設立知事報告」、「第 6 回パークレンジャー養成講座」、「泉佐野丘陵緑地見学会・花苗づくり体験」について報告した。

主な意見

・運営会議では、パーククラブが組織として育ち、運営会議に参画していただくことを一つの目標に進めてきた。今回、会長と副会長の二人に参画していただいたことで、その目標を達成することができた。また、実際に活動に携わっている方が運営会議に参画していただいたことで本来の運営会議の姿となった。

〇協議案件について

＜パークセンターの機能について＞

事務局から資料にもとづいて、「パークセンターの機能について」を説明した。

主な意見

・パークセンターを理想的なデザインの施設にしていくために、十分にプロセスを検討したい。

・この公園は府民参画型の公園づくりを目指している。単純に入札で一番安いところに委託するというやり方をしていると、設計段階にワークショップ的な要素が組み込むことができない。今後は最低でも事業プロポーザルのような方法で業者を決めていくことが理想である。

・調査や会議の記録の保管場所、会議室等、パーククラブ専用の活動スペースが必要になる。保管場所は、常に間仕切りが変化する多目的ゾーンにつくるよりも、管理運営機能があるスペースにつくる方がよい。

・守秘義務がある業務を行う管理室は仕切らなければいけないとしても、案内室からはガラス越しに管理室の中が見えたり、管理室の前に案内スペースがあるほうがよい。パーククラブの方々が案内するのであれば、前面にオープンスペースで案内スペースがあり、その背後に会議室や管理室があるなどの一体性のある空間として捉えたほうがよい。

・パークセンターの機能について、パーククラブから、会議用 PC やプロジェクターが必要という意見が出ているが、これらの件については設計段階ではなく、その後の備品整備のときに話し合う必要がある。

・公園管理者がパーククラブを指定管理者の一員として認定すれば、施設の中に専用の備品を設置することは可能だが、指定管理者として認定する以前のボランティア段階では難しい。施設を利用する団体の私物の道具は、パークセンター内で一切保管せず、公園で使用する道具は全て公園の備品とする、ということを決めておく等のルールを決めておくべきである。

・資料では休憩機能のあるスペースが単独で存在している。しかし、休憩機能、受付機能、展示機能の３つが一体的に存在し、可動式の間仕切りで自由にレイアウトを変更できるようにすれば、30 人から 100 人規模の講習や研修会に柔軟に対応できる。

・屋外と一体化した空間を建築デザイン的（床材や形状等）にどのように考えていくべきか整理が必要である。

・大阪府営公園では「ハートフルパーク」という理念で、あらゆる人が楽しめる公園を目指している。当該公園においても必ずコンセプトの中にバリアフリー、もしくはユニバーサルデザインを目指しているということを明示していただきたい。

・管理ユーティリティーゾーンにある倉庫と収納スペースが狭すぎる。また、トイレの数が少ないのではないか。

＜コラボレーション区域の設計について＞

事務局から資料にもとづいて、「コラボレーション区域の設計について」を説明した。

主な意見

・植生調査を行う際には、調査後も継続的に植生の遷移を観察するために、調査地の四隅に杭を残しておく必要がある。

・調査会社が植生調査を行う際には、現場講習会として、３回程度パーククラブにも参加してもらいたい。

・コラボレーション区域を計画するにあたって、場所の評価から計画に至るプロセスはとても難しい。

特に誰が評価するのかという点が重要である。
・調査会社が行う植生調査とパーククラブが行う植生調査では、調査のスピードが異なる。今後は、運営会議にどのように提案していくかという、スケジュール的な話も少し踏み込んで考えていく必要がある。
・運営会議では、原則的に公園内全ての情報を共有する。当該公園に携わる調査会社や業者は、あくまで運営会議のたたき台をつくることにとどめ、最終的には運営会議で共有・調整したほうがよい。先ほどの建物やデザインについても、基本的に運営会議で共有し、ワークショップ方式で意思決定していく場にしていかなくてはならない。
・設計業務を受託している事業者には、運営会議の場で素人もプロも一緒に設計について検討できるような資料をつくるべきである。その資料をもとに、運営会議で施設のデザインについて議論した上で意思決定を行うべきである。設計に反映できる事業者が育たないと、参画型の業務は展開していかない。
・パークセンターは、どのような活動が行われるかを考えてから設計するべきである。そうでなければ、従来の公共事業のような形になってしまう。
・コンセプトブックもバインダー方式で毎回資料を増やしていけるような仕組みを検討して形にしていかなければいけない。
・何ヶ所か植生調査を行えば、その結果をもとにエリアのタイプ分けが可能になる。タイプ分けごとの地図を様々なスケールでつくっていくことが今後の作業となる。
・道づくりや建物の設置など、その場所で行う活動に応じて、必要な植生の情報があればよいので、全エリアで調査を行う必要はない。学術的な植生調査と、具体的にその場所で何か活動するために行う植生調査とでは調査方法が異なる。
・まずは相関植生図を作成し、その図に大径木調査の結果を落とし込むのが良い。管理用道路をつくる際には、自然に負荷をかける作業であるため、毎木調査のように詳しく調査を展開していく必要がある。パーククラブがつくる踏み分け道のようなルートの整備では詳細な毎木調査は必要ない。土地の用途に応じて、調査の方法を考えていくほうがよい。

〇合意形成案件について

事務局から資料にもとづいて、「パーククラブの今後の展開について」を説明した。

主な意見

・パーククラブの広報活動としては、ホームページの開設や会報誌を作成していきたいと考えている。ホームページについては、パーククラブが単独で開設するのか、大阪府のホームページの中に作成するのかを検討することが必要だと考えている。
・パーククラブでは、平成 25 年度末の開設に向けた府民へのサポート活動として、来園者に対する環境学習を行いたいと考えている。
・広報やホームページをつくる以前に、まずは府民が公園にやってきて学習していくためのツールを大阪府と協働で作成するしくみが必要である。
・諸連絡などは、事務局を介して連絡を取るのではなく、携帯電話やメールなどすぐに連絡がとれる手段で行い、密にコミュニケーションをとっていくことが重要になる。パーククラブは今後メンバーの数が増えていくので、今の段階からクラブ内のコミュニケーション方法について、基礎を固めていくことが必要である。
・広報活動はとても重要である。これから活動していく上でマスコミ等からインタビューを受ける機会

も増えてくる。そのためにも、記録写真の撮影担当を決めて普段の活動写真をしっかりと記録に残しておく方が良い。

・広報活動は非常に重要であるが、ホームページ作成などは専門的な技術が必要である。専門家とコミュニケーションをとりながらデザインをしていけるパートナーの存在が必要である。

・2 期生がパーククラブに入会した後、ホームページをつくるチームや動植物の調査のチームなど、様々な分野ごとの小グループに分けていくことを検討している。

・運営会議の議案に、報告事項として開催計画と実績があるが、今後運営会議で議論を進めていくためには、さらに詳細なスケジュールの報告が必要である。運営会議の開催計画だけでなく、パーククラブが行う活動計画や設計の進捗状況、パーククラブと一緒に計画しているプログラム等、３ヶ月程度のスケジュールを出していただければ、運営会議からもアドバイスができる。概念的な議論だけでなく、詳細な活動内容や進捗状況を踏まえた議論を運営会議で行いたい。運営会議自体も、現地対応、行動対応に変えていかなければいけない。

・パーククラブが他の公園に見学に行く際は、そこで活動されている方と交流する時間を取ることが重要である。